

## 本学における小児看護学実習の現状と課題

— その1 医療施設実習において —

呉大学看護学部看護学科

大原 美香, 荒木 妙美, 津田 茂子

### ■ はじめに

医療制度の改定に伴い、在院日数が年々短縮の傾向にあり、年代別では小児の在院日数がもっとも短くなっていることが厚生労働省の患者調査において報告されている。そして小児の急性期病院においては、在院日数がさらに短くなっている現状がある。

本学の小児看護学実習の医療施設は、急性期疾患を対象とする病院であり、入院期間の多くが5日以内である。従って実習期間中にほとんどの受け持ち小児が退院していくため、医療施設実習期間を短縮し、一週間の実習としている。これは他の看護学領域と比較しても短い受け持ち期間であると思われる。

学生は成長・発達過程にある小児および家族との関わりを通して対象を理解し、個別的看護の実践が求められる。しかし、学生が核家族や子どもとの接触体験が少ない傾向にあることから子どもとどのように接してよいのかわからず、戸惑うことも多い。学生にとっては、苦痛や不安・緊張感をもつ小児や家族と関わりながら、4日間で看護過程を展開することは容易ではないと思われるが、さまざまな検討を重ねながら展開してきた。

このような小児看護実習の背景から、医療施設実習期間の短縮による学生の学習の現状を把握・評価し、学生にとってより充実した実習の構築に向けて課題を明確にしていきたい。

### ■ 研究目的

- 1 過去3年間の学生の実習の現状をもとに医療施設実習の現状と課題を明らかにする。
- 2 実習方法変更に伴う実習評価を行う
- 3 短期間の実習における個々の学生の能力を引き出す実習指導について検討する。

### ■ 研究方法

#### 1 対象および期間

A 大学看護学部看護学科	3 年生
平成15年度	72名
平成16年度	75名
平成17年度	71名

#### 2 方法

学生が受け持った小児の事例の内訳、実習のまとめと感想、実習指導者・教員との会議記録などを検討し、分析した。

### ■ 小児看護学と小児看護学実習の位置づけ

#### 1 小児看護学の組み立て

本学における小児看護学の構成は、看護関連科学の「小児疾患・治療論」(1単位)が2年前期に開講され、実践応用看護学においては「小児看護学概論」(1単位)が2年前期、「小児看護学援助論Ⅰ」(2単位)2年後期、「小児看護学援助論Ⅱ」(1単位)3年前期と理論的理解を段階的に進め、3年後期から「小児看護学実習」90時間(2単位)を開始する。

基礎看護学の理論、看護技術の学習を基礎とし、小児看護学では子どもの特性や健康問題をもつ子どもと家族を理解し、成長発達過程にある子どもの特性に応じた援助のあり方について学修することをねらいとしている。

## 2 小児看護学実習の目的・目標

小児看護に関する既習の概念や理論と実践とを統合することにより、対象理解を深め、より個別的な看護援助を探究することができる。また、実習体験を既習の学習と関連づけてとらえることで、より望ましい小児看護のあり方と役割を考察することを趣旨とし、以下の目的・目標を掲げている。

### 1) 目的

小児看護の概念や理論をふまえ、成長・発達過程にある小児および家族との関わりを通して対象理解を深め、個別的看護を実践し探究する過程を学修する。また、実習体験を通して倫理的視点を養うとともに、現代の小児と家族が抱える問題をとらえ、小児看護の役割とあり方を探究する。

### 2) 目標

- (1) 様々な成長・発達レベル、健康レベルにある小児および家族の特性を理解する。
- (2) 対象者の健康問題・看護問題を明らかにし、成長・発達の促進、健康レベルの向上につながる個別的看護を実践し、評価する。
- (3) 小児看護の対象である小児および家族にとって最適な環境を考え、QOLの向上につながる援助を探究する。
- (4) 看護実践の場で遭遇する倫理的ディレンマに気づき、小児保健医療チームの連携と望ましい小児看護のあり方と役割を考察する。

## ■ 小児看護学実習方法

実践応用看護学実習は1グループ、5～6名の学生で3年次後期から4年次前期にかけて各看護学領域をローテーションしながら実習を展開していく。

平成15年度までの小児看護学実習は、医療実習施設の確保と実習指導にあたる教員が整わなかったこともあり、医療実習施設の小児病棟実習、小児外来実習と保育所実習を組み合わせながら実習を組んでいた。(図1)

平成16年後期からの実習に関しては、以下のような現状が明らかとなった。

- 1 前期実習期間に医療実習施設が3クール確保できた。しかし、他の看護学校との重複で2週間にわたる実習は困難であった。
- 2 小児看護学実習の4医療実習施設のうち3施設が主に急性期疾患患児が入院する病院であり、受け持ち期間が3～4日間である。
- 3 重度心身障害児病棟での実習が、実習時期と児の易感染を考えて実習が困難となった。
- 4 保育所実習の施設が遠距離であったが、大学近隣での保育所が確保できた。

従って、2週間の実習スケジュールを土、日、月曜日ははさんだ6日間から1週目の4日間に変更し、2週目の月曜日に看護過程を振り返り、個別指導にあてた。更に保育所実習を2日間から3日間へ変更し、実習最終日は医療実習施設と保育所実習での学びを関連づけ、統合した学習効果が得られるよう個別に指導を行った。(図2)

## ■ 結 果

### 1 学生の受け持ち事例

平成15, 16, 17年度における受け持ち事例につ

平成15年度までの小児看護学実習スケジュール (図1)

月	火	水	木	金	月	火	水	木	金
学内実習	医療施設実習				学内実習	医療施設実習		保育所実習	

平成16年度からの小児看護学実習スケジュール (図2)

月	火	水	木	金	月	火	水	木	金
学内実習	医療施設実習				学内実習	保育所実習			学内実習 まとめ

いて以下に述べる。

- 1) 受け持ち事例の男女比は、各年度とも男児が多いが、ほぼ均等になっている。(表1)
- 2) 学生自らが受け持ち事例を選択できるよう病棟で配慮されている。平成16年度は乳児期の事例が少なく、多少のばらつきがある。しか

し、全体的に乳児期から幼児期と年齢の低い小児の事例が多く、学童期以降の事例は極めて少ない。(表2)

- 3) 最も多い主要な看護介入については、急性期の疾患患児が入院する病院では平成15, 16, 17年度ともに「症状の緩和」である。次いで

表1 受け持ち事例の内訳 (性別) (学生数)

	平成15年度 (72名)	平成16年度 (75名)	平成17年度 (71名)
男児(人)	38	40	41
女児(人)	34	35	30

表2 受け持ち事例の内訳 (年齢別) (学生数)

	平成15年度 (72名)	平成16年度 (75名)	平成17年度 (71名)
乳児(1歳未満)	16	5	15
1～2歳児	18	23	18
3～4歳児	12	18	13
5～6歳児	6	15	15
学童(低学年)	5	7	5
学童(中学年)	10	4	4
学童(高学年)	4	1	1
中学生	0	2	2

表3 受け持ち事例の内訳 (主要看護介入)

急性期病院の場合

(学生数)

	平成15年度 (72名)	平成16年度 (75名)	平成17年度 (71名)
清潔への援助	6	14	10
症状の緩和	14	17	13
緊張・不安の緩和	4	6	6
危険の防止	11	6	6
ストレスの緩和	8	6	4
健康生活への指導	2	3	3
疾患知識教育	3	6	6
母親への精神的援助	3	1	1
創部の安静保持の援助	0	1	2
服薬への支援	3	1	4
排泄(トイレ)への援助	0	1	1
合計	54	62	56

重度心身障害児・肢体不自由児施設の場合

(学生数)

	平成15年度 (72名)	平成16年度 (75名)	平成17年度 (71名)
危険の防止	8	3	3
活動制限のストレス緩和	0	3	2
トイレ・トレーニングへの支援	1	2	2
栄養・清潔教育	0	1	1
便秘の改善	0	1	1
リハビリへの支援(遊び)	2	2	3
食事の援助	7	1	3
合計	18	13	15

表4 受け持ち事例の内訳（急性期病院における受け持ち小児の疾患）（学生数）

	平成15年度（72名）	平成16年度（75名）	平成17年度（71名）
肺炎	15	15	5
気管支炎	18	17	25
気管支喘息	4	3	7
咽頭炎	4	4	4
熱性痙攣重積	1	3	4
急性胃腸炎	6	4	3
川崎病	2	3	2
ネフローゼ症候群	0	3	0
アレルギー性紫斑病	0	2	2
その他	4	8	4
合計	54	62	56

多いのは、平成15年度の「危険の防止」、平成16、17年度では「清潔への援助」である。平成16年度以降、連続した4日間の実習期間に変更したことで、入院から退院に向けての看護介入が増え、「疾患知識の教育」や「健康生活への指導」を実施した事例が多くなっている。

重度心身障害児・肢体不自由児施設では、平成15年度の「危険の防止」、「食事の援助」が多い。それに比べ、肢体不自由児施設の実習へ変更した平成16、17年度では看護介入に大差がない結果となった。加えて受け持ち小児の障害や成長発達段階に応じた援助や支援の必要性から「栄養・清潔教育」、「便秘の改善」が新たに加わり、直接的な食事介助をしめる「食事の援助」が少なくなっている。（表3）

4) 急性期の疾患患児が入院する病院は、平成15、16、17年度とも肺炎や気管支炎などの呼吸器疾患が多く、症状の重症度や年齢による相違は多少あるが、1週間以内の入院期間である。また、本学実習の医療施設の特性から入院期間が比較的長くなる疾患は川崎病、ネフローゼ症候群、アレルギー性紫斑病であった。これらの受け持ち事例は平成15、16、17年度ともに少なかった。（表4）

## 2 学生の学び

医療施設実習最終日のカンファレンスノートに記載された内容を「小児看護学実習を通しての学び」と「小児看護学実習での困難さ」という視点から分析した。（表5、6）

平成15、16、17年度をとおして、1 小児と家族双方への援助の必要性、2 発達段階に応じた

表5 学生の感想（小児看護学実習を通しての学び）

○大半の学生の感想 △少数の学生の感想 ×感想なし

小児看護学実習を通しての学び	平成15年度	平成16年度	平成17年度
小児、家族(母親)双方への援助の重要性	○	○	○
発達段階と個別性を考慮した援助の必要性	○	○	○
発達段階に応じたコミュニケーション方法	○	○	○
個々の小児の発達を促す援助の大切さ	△	○	○
受け持ち時から退院に向けた援助を考える	○	○	○
全体像をとらえることで、個々にあった援助が提供できる	○	○	○
早期に全体像を把握し、看護問題を明確にすることの重要性	×	○	○
小児と家族の身体的・心理的・社会的側面からアセスメントすることの重要性	△	△	○
積極的な姿勢をもって実習に臨むことの大切さ	×	○	×
実施した援助を評価しながら、目標達成に向けて援助していくことの意味	×	×	○

表6 学生の感想（小児看護学実習での困難さ）  
○大半の学生の感想 △少数の学生の感想 ×感想なし

小児看護学実習での困難さ	平成 15 年度	平成 16 年度	平成 17 年度
小児の健康レベルに看護展開が追いつかない	○	○	○
個別性のある援助を展開するための情報収集とアセスメント	○	○	○
小児および家族とのコミュニケーション	○	○	○
小児の観察とそのアセスメント	○	○	○
発達段階に応じた見守りの援助	×	○	△
発達段階に応じた小児の特性理解	○	△	△
個別性のある退院指導の実施	△	○	○
発達段階に応じた援助や関わりを工夫すること	△	○	○
小児との関わりの経験不足から積極的にできない	×	○	×
情報を分析して全体像をとらえること	△	○	△
相手に自分の考えを伝えること(記録、口答)	×	×	○

援助やコミュニケーション方法、3 全体像を把握した、個別的援助の必要性、4 退院に向けての支援や教育について学んでいる。

また、学生は小児と家族を身体的、心理的、社会的側面からアセスメントすることの重要性を学んでいるが、実習期間が変更となったことでより早期から看護過程を展開することが必要となったため、日々の実践を評価していくことの意味や必要性をより理解することができるようになっている。

実習を通して学生が困難とすることは、小児や家族とのコミュニケーションに加えて個別的看護の提供に向けての情報収集やアセスメント、病状の変化に伴った看護過程の展開である。そして、発達段階に応じた援助やコミュニケーション方法、個別的看護、退院に向けた支援や教育など学生の学びであった項目が困難さにもつながっている。

### 3 実習評価

各医療実習施設と実習評価会議記録および実習期間中の指導者との調整内容から、主に臨床指導者側から報告された意見を学生の「目標達成度」と「実習指導内容」について分析した。(表7, 8)

実習期間中、学生が困難と感じる看護過程の展開が遅いことは、臨地実習現場での評価となりやすく、小児や家族の理解や看護過程の展開といった項目は目標達成度が低い。そしてこれは実習期間とは関係なく、平成15, 16, 17年度をとおして同様の評価となっている。しかし、成長発達段階を考え、個別性のある援助やコミュニケーションなど学生が実践を通して学んだ項目に対して目標達成度は平成15年度の方が高く評価されている。学生は実際には、個々の受け持ち小児の状態に応じた援助を実施しているにもかかわらず、記録はマニュアル的な援助計画で終わっている場合もある。

表7 実習評価会議（小児看護学実習の目標達成について）  
○大半の指導者の意見 △少数の指導者の意見 ×意見なし

小児看護学実習の目標達成について	平成 15 年度	平成 16 年度	平成 17 年度
様々な健康レベルにある小児の身体的、精神的、社会的成長・発達状況と家族(母親)の理解	△	△	△
看護問題を明らかにし、解決に向けての目標と具体的な計画を示し、評価できる	△	△	△
小児の反応や行動の意味を考えることができる	△	○	○
発達過程に応じたコミュニケーションの工夫	○	○	○
小児と家族の安全、安楽、自立を考慮した援助	○	○	○
自己の実践を評価し、自己課題を明らかにする	△	△	○

表8 実習評価会議（小児看護学実習指導について）  
○大半の指導者の意見 △少数の指導者の意見 ×意見なし

小児看護学実習指導について	平成 15 年度	平成 16 年度	平成 17 年度
学生間に実習へ臨む姿勢の格差がある	○	○	○
小児や家族とのコミュニケーションがとりにくい学生について	△	○	×
アセスメントが不十分で全体像が把握しにくい	○	○	○
健康レベルを考えた看護問題の明確化と援助内容	○	○	○
行動計画や報告などの確に伝えることができない	○	○	○
援助の実施はするが、看護過程の展開ができない	○	○	○
カンファレンスの内容、進め方について	○	○	○
指導者と教員の役割と連携について	×	○	×

指導内容に関しては、事前学習を含め実習姿勢に学生間の格差があり、そのために個々の学生のレディネスに応じた指導の必要性が伺われる。そして看護過程の学習が不十分な学生に情報を提供しながら、看護問題や援助内容を具体的にアドバイスすることが主な指導内容となっている。

また平成16, 17年度においては日々のカンファレンスで、具体的内容のアドバイスにより学生の理解や学びが深まるよう配慮されている。

平成16年度は、指導者と教員間の役割の明確化と連携についての必要性が表面化してきた。平成15年度の6日間あった実習期間では、期間の途中で翌週に向けた調整が必要であり、それを実施していた。しかし実習期間が短縮した平成16年度は、調整の時間をもつことが困難となりつつあった。その評価から翌年度は必要時、または日々調整時間を持ち、指導者と教員というそれぞれの立場から個々の学生指導について話し合いをもっている。

以上の結果より、実習期間を短縮したことにより、臨地実習内容や学生の実習目標達成度、指導者の実習評価に相違や影響はみられなかった。さらに今後の小児看護学実習を検討していく上で、以下のような点が明らかとなった。

- 1 看護過程の展開を困難に感じる学生が多く、実践の場においても小児の健康レベルに展開が追いつかない。
- 2 接触体験の少ない小児および家族とのコミュニケーション、個々の小児の成長発達段階の理解に時間を要す。
- 3 学生自身が看護援助を実践することで、健康障害をもつ小児の理解が深まる。
- 4 学生間のレディネス、モチベーションに格差

が生じている。

## ■ 考 察

### 1 実習施設と受け持ち事例について

本学は小児看護学実習施設として4施設確保している。そのなかで2施設は混合病棟であり1施設は肢体不自由児施設、1施設が小児病棟である。施設までの距離もとおり、約1時間半から2時間の通学時間を要している。

こうした中、これらの実習病院は地域に貢献するべく救急医療の体制をもち、入退院の頻繁な病院であるため、受け持ち児の疾病は急性期疾患となる。したがって、できるだけ早期に受け持ち児の看護過程が展開できるように、小児看護援助論Ⅰと小児看護援助論Ⅱにおいて学習目標を構成している。小児看護援助論Ⅰにおいて理論を学び、小児看護援助論Ⅱの紙上患者（実習で受け持つであろう患者）をとおして自分で看護展開ができるように個別指導を行うことで、臨地実習が円滑に行われていると思われる。

### 2 小児看護学実習における学生の「困難さ」について

学生は、小児や家族との関わりや援助に困難を感じているが、これは子どもと接する経験を持たない学生が多く、どのように受け持ち小児と会話し、関わり、援助をしていけばよいのか、わからないことによるものと考えられる。このような学生は受け持ち小児の理解に時間を要し、学生自身も短期間の実習で援助につなげられるような関わりを築くことは困難と感じていることが報告されている<sup>1)</sup>。また、急性期疾患の受け持ち小児のほとんどは、家族（主に母親）が付き添って日常の

世話をしており、学生が母親に遠慮することで積極的な関わりをより持ちにくくしているとも考えられる。

そして小児と家族とのコミュニケーションが難しい状況に加え、急性期疾患をもつ患児の状態や症状の変化が早いことにより、より受け持ち小児の理解、ニーズの把握を困難とし、短期間での看護過程の展開が厳しくなっていることも予測される。

また、このような学生が困難と感じる状況に加えて、現代の学生気質によるところも大きいと考ええる。現代の若者は、核家族や少子化の影響を受け、与えられた環境の中で干渉を受けながら育っている事を考えるとコミュニケーションのとり方がわからない、主体性や創造性の欠如、学ぶ力や思考力の弱さがあり、これは人との関わりや看護過程を展開していくことに影響をしていると考えられる。

### 3 学生個々の自己効力感を高める実習指導

学生の受け持ち小児や家族との関係づくりへのサポートは、積極的な行動の動機づけにつながると考えられる。学生が、小児や家族との「関わり方のモデルとなるような場面をみたり、子どもからよい反応を得られるような体験が、実習の困難さを軽減させるという報告があることから、スタッフや教員からのアドバイスやモデル提示は重要である<sup>2)</sup>」といわれており、行動の動機づけになると考えられる。

つまり、教員は個々の学生のレディネスを早期に見極め、個々の学生の動機づけとなるよう目的や段階的な関わりもち、進めることが重要である。本学は教員が常時、臨地で実習指導にあたっているが、限られた実践現場で多くの体験を学生自身が実感でき、学びが豊かになるよう、教員の教育的な介入が実践されている。このような学生の体験は「看護過程を理解」することにもつながり臨地実習での教員の役割は重要である。

学生が困難とする看護過程を含めた実習の記録は、学生自身が自信をもてない背景が考えられる。学生は、教員の評価や指摘と期待に応えたいという裏腹なプレッシャーで自信が持てず、完璧な記録を期待されていると解釈していることも考えられる。しかし、教員が期待しているものは完璧な看護過程ではない。断片的な記録であってもそこから学生の思考を引き出し、看護援助に役立つこ

とを学生に体験させることが大切である。臨地実習での体験を通して学生の思考力を育てる教員の果たす役割は大きいと思われる。

### 4 臨床実習者と教員の連携

実習期間の変更に伴い、臨地実習現場では小児看護学実習の目的・目標が達成できるのか、といった危惧も指摘された。しかし、今回の結果から、実習期間の変更による相違は認められなかった。本学の小児看護学実習の医療施設は、大学の附属施設でないことから学生指導に対する意識に違いが生じやすい。そのために積極的な大学からの臨床への働きかけが必要となってくると考えられる。本学の小児看護学実習施設は、他の看護学校と重複している施設がほとんどであるため、他校の学生のレディネスや方針などを確認し、臨床側に戸惑いが生じないように、毎日の実習終了後にカンファレンスを実施することで、臨床実習指導者と大学教員の実習指導を客観化することができている。

このように、臨床実習指導者の実習観と大学教員の小児看護学実習観にずれはないか、確認し、お互いの理解が深められるように働きかけていくことも大切である。

実習期間を短縮したことや急性期の疾患をもつ小児が入院する病院を実習施設にもつことから、小児と家族に関わる場面ごとに看護の実践が求められる。臨床実習指導者、教員ともに個々の学生の困難とする事柄に対して、モデルを示しながら具体的なアドバイスを行い、看護の方向性を示唆していく関わりが重要となる。また、必要であれば指導者に学生のレディネスや傾向性について情報を伝え、指導者と教員が一貫した意図的関わりをもてるよう連携していくことが大切である。加えて教員や指導者が学生のストレスとならないように配慮することも大切である。そして教員はできるだけ学生の立場を理解し、指導者は学生の努力を認め、誉めることで学生に学習の動機づけをする役割となることを認識しておくことも重要である。

### ■ おわりに

小児病棟が閉鎖されていく中、小児医療施設での実習は、今後益々厳しい状況となる可能性がある。その中で学生も様々な学びを得る一方で困難

と思われることにも遭遇している。学生が小児や家族と関わり、不安なく看護援助を提供できるよう、臨床の現場でより指導者と教員が連携を深め、小児看護特有の理解と技術援助方法、個々の学生の学びへの支援が行われる必要がある。

小児看護を目指す学生は少数であるかもしれな

いが、成人の中に小児が存在する混合病棟が増えていく現状から将来的には小児を看護する機会があることも考えられる。実習体験を通して小児看護の基本的な考え方を培ってほしいと思う。

保育所実習については次回報告する。

#### 引用参考文献

- 1) 大木伸子・濱中喜代・日沼千尋他 1998 小児看護実習を問う, 小児看護21(12), p.1650~1659, へるす出版
- 2) 江本リナ・長田暁子・鈴木真知子他 1999 小児看護実習を行う学生に関する研究の動向と今後の課題, p.32~33, 第30回看護教育
- 3) 小室佳佳文・前田和子・長崎多恵子 2002 急性期医療施設における小児看護学実習;子どもとの関係づくりへの支援, 株メヂカルフレンド社
- 4) 三浦清世美・浅野みどり・石黒彩子他 2002 小児看護学実習における実習指導の実際と課題, 株メヂカルフレンド社
- 5) 宮下弘子・宮原春美・前田規子 2002 本学における小児看護学実習の展開;病棟実習について, 長崎大学医学保健学科紀要